



# 植柳の風

八代市立植柳小学校 校長室便り  
平成31年3月25日NO. 132

## 師との出会い

「最後に子どもたちに伝えたいメッセージをお願いします。」(記者)  
「そうですね。野球だけでなくいいんですよね。自分が夢中になれるものを見つけてくれたら、それにエネルギーを注げるので、それを早く見つけてほしい。それを見つめることができれば、自分の前に立ちはだかる壁にも向かっていけると思う。」

3月21日(木)、大リーグマリナーズ外野手のイチロー選手が試合後の引退会見で述べた言葉である。

日米のプロ野球選手として大活躍したことは、今さら触れるまでもないだろう。修了式でも述べたが、3歳の頃、野球と出会い、小学校の時のバッティングセンター通いで、すでに小学3年生の頃には、時速100kmのボールを打っていたなど、その伝説ぶりは幼少期から始まっている。

しかし、彼は自分でも述べているが、けして「天才」ではない。わかっているだけでも様々な苦難や試練も、努力で克服してきた人である。

彼は愛知県出身。小学校時代からエースで4番として活躍し、6年生で全国大会出場。中学時代には、全国大会で3位の成績を残している。しかし、地元高校野球の名門校 愛工大名電に進学をし、甲子園出場を2年生・3年生のときに出場を果たしたが、いずれも初戦敗退。おまけに交通事故に遭って、投手から野手に転向を余儀なくされている。ドラフトも地元憧れのドラゴンズではなく、オリックスの5位指名。さらに入団後も、監督や打撃コーチからあの独特の振り子打法を直すように指導を受けたことに反発。2年間は2軍生活を過ごしている。



しかし、3年後、新しい出会いがあつて、イチローは生まれ変わる。この年から監督に招聘された仰木彬監督は、イチローのすばらしい打撃センスを見抜いて、1軍のレギュラーとして定着させ、打撃フォームも、それまでのイチローのこだわりを理解し、新しい次代のヒーローを誕生させたのだった。仰木監督なくして、イチローは生まれなかったのである。

現在、ロサンゼルス・エンゼルスで活躍する大谷翔平選手にも同じことが言える。彼が日本ハムに入団したのは、2013年、今から6年前になる。当時は、彼は高校卒業後、すぐにメジャーに挑戦したいことを公言してはばからなかった。さらに、「投手で育成すべきだ。」「いや、バッターだ。」の論議が盛んだったことを覚えている人も多いだろう。高校野球の世界では、投手&四番打者というのはこれまでもいたわけだが、結果を残さなくてはならない厳しいプロの世界で、この両方をクリアするのは容易ではない。ドラフトで彼を指名した栗山英樹監督は、メジャー挑戦を夢見る大谷翔平選手に対し「誰も歩いたことのない道を歩いてほしい。」と二刀流で育てることを約束し、彼のメジャー挑戦を思いとどませたという。

イチロー選手や大谷選手たちのように、師との出会いによって、人生が大きく変わることがある。出会いと別れの季節を迎え、新たな出会いがまたやってくる。

